

平成 28 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

一般選抜

| | | |
|---------|-------|-----|
| 外国語学部 | | P 1 |
| 経済学部 | | P 3 |
| 文学部 | | P 6 |
| 法学部 | | P10 |
| 地域創生学群 | | P12 |
| 国際環境工学部 | | P13 |

推薦入試

| | | |
|---------|-------|-----|
| 外国語学部 | | P21 |
| 経済学部 | | P22 |
| 文学部 | | P23 |
| 法学部 | | P24 |
| 国際環境工学部 | | P26 |

A0 入試

| | | |
|--------|-------|-----|
| 外国語学部 | | P33 |
| 地域創生学群 | | P33 |

平成 28 年度入試の出題の意図、採点総評 《一般選抜》

◆ 外国語学部 前期日程（英語）

<出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力を判定する。

問題 1 は長文読解。長文を正確に読めるか問う。英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか（問 1）、“Clinton’s folly”が具体的に何を指すか正確に読み取れているか（問 2）、英文和訳の能力（問 3）を問う。

問題 2 は長文を読んで要約する問題である。英文がかなり複雑な箇所もあり、話の流れがきちんと把握できているかどうか、また英語がきちんと読みこなせているかを問う。

問題 3 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 4 も和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 5 は英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く力を問う。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

問 1 問 1 は記号で答えさせる問題で比較的良好に出来ていた。

問 2 概ね直訳は出来ているが、文脈から和訳すべき点が出来ていない。

問 3 （much lessなどの）連語は比較的良好に出来ていたが、単語の語彙力不足が目立った。

問題 2

9 行目まで文章の主題が何であることを明示しない展開となっており、その読み解きに苦労したように察せられる解答が多かった。文章の主題がsoilであることが 9 行目で明示されるが、それに気づいてもsoilを正確に訳せず、そのために要約が上手くいかない解答も多かった。Soilが主題であることが分からず、しかし自然環境破壊に関する単語が多いため、文章の主題を大雑把に環境破壊に関するものとして整理する解答も多かった。

問題 3

和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。時制やつづり、冠詞に誤りが多く見られた。

問題 4

この種の英作文では、完全に正しい答案というものはほとんど無いのだが、「間違い方」で差が出る。多少文法的に間違っている、多少意味がずれている、自然な英語が書けているかどうかポイントとなる。

問題 5

多くの解答が予測できるいくつかのパターンに収まるものだったので、他と異なるユニークな発想の解答には新鮮さがあった。英語が優秀で発想も面白い解答もしばしば見うけられた。

◆ 外国語学部英米学科 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい><答案の特徴と傾向>

問題 1

問 1

ほとんどの答案が、問題文の全体的な主旨は理解していたようだが、具体的な細かな内容について誤解しているものが多く、一文一文の正確な意味を十分に理解できているかどうかの評価のポイントとなった。

問 2

概して出来はよかった。問題文の内容を正確に理解した上で、設問に対し、自分なりの議論を論理的に展開できるかどうかの評価のポイントとなった。

問題 2

賛成、反対を明確に示した序論、問題点を明確に議論した本論、そして結論を有する論理的な構造をもつ解答が求められた。正しい文法に従い、きちんとした文構造の英文で書かれた上記の構造をもった答案が高く評価され、不完全な文、スペルの間違い、論理的議論の欠落は減点の対象となった。

◆ 外国語学部中国学科 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

グローバル化が進展中の現代社会において、人文学の学問分野でも既存の研究方法を乗り越えようとする潮流が形成されつつあること論じた一文を問題文とし、文章読解力、及び主題に即し自らの見解を論述することで、思考力及び文章力を測った。

<答案の特徴と傾向>

問題文の要約では、文章の主題となっている「グローバル・ヒストリー」を要約する答案よりも、「グローバル・ヒストリー」が登場する背景について説明するものがやや多かった。問題文を踏まえた論述では、「物事を総体的、大局的にみること」の具体例を挙げるのが難しかったようで、具体例が乏しいか、具体例として不適切な答案が多かった。

◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

平成 28 年度の一般選抜後期日程入試では、話題になったトマ・ピケティの説を取り上げ、現在の世界が直面している問題についての考えを問うこととした。そこには、日頃から世界的な視野を持って新聞等に接していれば、議論の背景は簡単に理解できるという出題者側の意図がある。また、関連する資料として、ピケティの説を裏打ちするグラフ、ピケティの説に対する慎重な意見、さらには問題解決のための具体的な政策を取り上げ、問題を多角的に捉える視点が重要であることを示した。受験生には、これら 4 つの資料を駆使しながら、自分の言葉で説明する能力と課題に対する処方箋についての考えを述べさせるなど、柔軟な発想と記述に際しての論理的展開力を求めた。

<答案の特徴と傾向>

問 1

1. 問 1 に対して、約 7 割の受験生は比較的に精確に読み解いている。その中には、自分の言葉で上手く説明している受験生も少なくない。
2. 問 1 には「資料 1 と資料 4 を用いて・・・説明しなさい」とあるが、しかし、資料 4 の図をまったく用いずに説明した答案が数枚あった。
3. また、問 1 とは関係が無い資料 2 や資料 3 を用いている答案もあった。

問 2

- A. 文が長く、読点が少ない。
- B. 資料を十分に使いこなしていない。
- C. 問に沿った説明ができていない。
- D. 誤字・脱字が目立つ。
- E. 資料 3 に依拠しすぎている。

◆ 経済学部 前期日程（英語・数学）

《英語》

<出題の意図・ねらい>

I、II

基本的な文法の知識と語彙力を有しているか、それらを活用してやや複雑な構文を解釈することが出来るか、さらに、文を超えたレベルで文脈を踏まえて英語を理解し、筆者の考え・主張を正しく捉えることが出来るかを見る。

III、IV

与えられた日本語の文を適切な表現を用いて文法的に正しい英語に訳すことが出来るかを見る。特に、日本語には現れない主語を英文において正しく訳出出来るかを見る。

<答案の特徴と傾向>

I

問 1

正答率はあまり高くなかった。(a)あるいは(d)とする誤答が多かった。

問 2

以下の傾向が見られた。

“originally”を「独創的」「特別に」等と訳している。

“trait” “possess”の意味が分かっておらず、文脈からもつかめていない。

It ~that 構文が理解できていない。

問 3

“neither extremely”と”more extreme”の違いという理解ではなく、“more productive”と“produce greater benefits”の違いと考えていると思われる答案が多くあった。

問 4

正答率が高かったが、(C)を選択しているものが散見された。

問 6

“autocratic”を”automatic”と取り違えている答案が多かった。

II

問 1

正確に解答出来ている答案は極めて少なく、「1月1日午前0時1分頃」といった解答が目立った。

問 2

That 節の部分を正確に訳している答案が少なかった。

ほぼ正解している答案と不正解の答案のばらつきが大きかった。

“present”を正確に訳せていない答案が目立った。

問 3

文法を間違っ和訳している答案が多く見られた。時制の理解が不十分で、現在形と過去形を誤って和訳している答案が見られた。

問 4

“as they did”の”as”を適切に訳せていない解答が目立った。

主語の”they”を理解できていない解答は比較的少なかった。

問 6

助詞の不適切な使用に起因する文脈の不整合が散見された。

「が」の順接用法と逆接用法が混在しているため、内容が取りにくい答案が多かった。

対比の示し方が不十分な答案が多く見られた。

III

主語が適切に訳出出来ていない。

「感受性」が訳せていない答案が多かった。

IV

“challenge”の使い方が不自然な答案が多く見られた。

“I can't it.”や“I can't do.”といった誤用が多かった。

「三年くらいたって」を”3 years ago”と誤って訳している答案が多かった。

《数学》

＜出題の意図・ねらい＞

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

＜答案の特徴と傾向＞

問題 1

数列についての基本的な知識を問う問題です。(1)(2)は問題文で示された数列の和から最初の 2 項と一般項を求める問いです。数列の和と一般項の関係を理解すれば容易に解けます。(3)は公比が $1/2$ の等比数列の和を求める問いです。(1)(2)(3)はよくできていました。(4)は問題文で示された定義によって漸化式を求める問いです。問題文に沿って式を書き換える工夫が必要です。(5)は、等差数列の 2 乗と等比数列の各項どうしの積で与えられる数列です。求めるには工夫が必要ですが、(4)の結果を用いれば比較的容易に解答できます。正解者はごく僅かでした。

問題 2

2 次関数をベースに以下の内容(1)(2)(3)を問題として出題しました。(1) x に関する分数式の不等式を解き、次にその分数式を真数とした対数について解析ができるかを確かめる問題でした。後者は正答率が高かったのですが、前者はとても低かったです。分母と分子の中の x で何の断りもなしに約分していた答案が多く見られました。(2) 関数の絶対値の定積分を扱う問題でしたが、 a の値によって場合分けをして積分する必要がある問題でしたが、場合分けが出来てない答案が目立ちました。(3) 座標平面上の関数について幾何学的な思考を問う問題でした。きちんと図を書いて平行四辺形(長方形や正方形を含む)ができる場合を探してほしかったのですが、不十分な答案が多かったです。全体を通して、慎重に場合分けできている答案とそうでない答案に 2 分化されていました。

問題 3

全体に、理解ができている人とできていない人で、かなり差が見受けられました。図形の性質を使って、計算を簡素化する練習もしておきましょう。(1)では、題意をきちんと理解できた人が多く、正答率も高めでした。座標平面を書いてみれば、簡単な問題であったと思います。(2)では、計算がやや複雑だったようで、考え方は正しいけれども計算ミスをしてしまっている答案が多く見られました。(3)では、直線が直交する条件をきちんと理解できていたようで、正答が多く見られましたが、中には、直線の傾きを間違える答案が見

られました。(4)は、(3)が正確に求めれば答えが得られますが、kに関する条件を忘れている解答が見られました。

問題 4

(1)は基礎的なのでよく解けていました。(2)と(3)では、具体的なイメージが分かった人は計算がうまくできたのではないかと思います。ただし、全体に計算ミスが多くみられました。(4)は細かく場合を調べて求める方法もありますが、確率の対称性を使うことに気付いた人は答を簡単に導けたのではないかと思います。(5)は原因の確率ですが、条件となる場合と求めるべき確率を明確に理解できていれぱうまく計算できたのではないかと思います。この種の問題では、日ごろから樹形図を書いて全体を把握する練習をしておきましょう。計算ミスを少なくできます。

◆ 経済学部 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

後期日程の小論文は、ウィリアム・H・マクニール(高橋均訳)『戦争の世界史(上)——技術と軍隊と社会』中央公論新社、2014年から一部を抜粋して出題した。

今回は、受験生の論理的思考能力を試したいという意図から、和訳された少し硬めの文章の本書を選んだ。課題文を読んで、いわゆる「指令」経済と「市場」経済との対比関係が十分に理解できていれば、三つの設問にも比較的容易に答えられたのかもしれない。設問のなかで、問1と問2は課題文の内容を理解し、正確に把握して簡潔に纏める能力をみる問題であり、問3は課題文の内容を踏まえた上で、自らの考えを論理的に表現・展開する能力をみる問題である。

<答案の特徴と傾向>

若干課題文の内容が難しかったのか、総じて点数は低かったと思う。特に問1の解答の間違が多かったのではないだろうか。解答として求める内容(理由)が直後ではなく、かなり後に出てくる(離れている)ために、「市場」経済について正確に読み取れていない答案が目立った。それと比較すると、問2のほうは解答しやすかったのか、正解が多かったように思う。また、問3は、自身の考えを論理的に表現・展開する能力をみる問題であるが、受験生にはこうした問題に対して苦手意識があるようで、総じて点数は低かったように思う。解答にあたっては、課題文の内容を正しく理解し、自分の考えを矛盾なく、大きな論理的飛躍がないように論じることが大事であるが、正しく論じることができていない例としては、「企業の避難所」を正しく解釈できていない解答や事前に学習したとみられる内容を設問の解答としてうまく活用できていない解答(当該設問に関係なく、あらかじめ準備していたとみられるような解答)がみられた。

◆ 文学部比較文化学科 前期日程 (総合問題)

<出題の意図・ねらい>

問題 I 英文読解

「ベヴァレッジ」という言葉のイギリスとアメリカにおける用法の違いを通じて、言葉に対するイギリス

人とアメリカ人の態度の違いを考察した英文を出題した。論理的な英文を全体としての的確に読解できているかどうかを主に問うている。

問1 基本的な英文和訳の問題である。「ハイフン」なども使用している、ある程度こなれた英文を日本語で処理できるかどうかを重視した。

問2 問1と同様、基本的な英文和訳の問題である。文章自体はさほど複雑ではないが、意味は決してとりやすいものではない。

問3 イディオムの知識を問う穴埋め問題である。

問4 下線部を引いた文章内で述べられていること具体例を文章中から探し出し、それを説明する問題である。最低でもその文章が含まれる段落を全体として理解していないと、回答は困難である。

問5 英文和訳の問題であるが、非常に長い文章の和訳を求めているため、日本語力も問われるものとなっている。

問6 問5と同様、比較的長い文章の英文和訳である。また、問題文全体を理解していないと回答は困難である。

問題Ⅱ 英作文

小説家の池澤夏樹が、旅行と読書との関係について書いたエッセイから出題し、和文英訳力を問うた問題である。(1)は、日本語からの直訳がほぼ可能なものとなっており、さほど難しくはない。(2)は、比較的長い文章の英訳となっており、英語の構成力を問うものになっている。

問題Ⅲ 現代文(理論的文章)

文芸批評集の中から、作家に関する考え方の変化について論じた文章を選択した。従来の作家観と作品観はどのようなものか、新たにでてきた作家観と作品観はどのようなものであるかを押さえることができているかを問う設問とした。

問一 「作者と作品は、一度分離させられたうえで、ふたたび結合させられなければならない」という一文を詳しく説明する問題。傍線部の直前の一文から、新しくどのような作者観が出てきたのかを押さえた上で、解答を作成する必要がある。傍線部は問題文全体を要約する一文であるため、本文全体を理解できているかを問う設問と言える。

問二 「作者と作品の逆説」とはどういうことかを説明する問題。従来の作者と作品の関係に関する考えはどのようなものであったか。その関係が近年どのように変わったため、逆説に見えるのかを、簡潔に書くことができるかを問うた。従来の常識的な考え方に反する作者・作品観を、主に問題文の後半を根拠にまとめる力が必要となる。

問題Ⅳ 現代文(国語表現)

問一 よく使用される言葉で、同音異義語が多いものを出題した。変換の際の間違いなどが多い言葉であるが、正しく理解しているかを問うた。

問二 中学・高校でも馴染みの深い故事成語から出題した。日常的に用いられる言葉の意味を理解し運用できるかどうかを問う設問である。

問三 よく用いられ、誤用されやすい言葉の意味を問うた。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ 英文読解

- 問1 ,カンマやハイフンを多用した文章だったため、切れ目を読み違う解答が散見された。Asを正確に翻訳できていない者も少なからずいた。
- 問2 比較的うまく訳した解答が多かったが、used toの誤訳が多く見られた。また、構文の読み違いによる誤訳も散見された。
- 問3 正答率はきわめて高かった。
- 問4 言語における単語の意味の変化について問われているのに対し、使用の傾向を回答した誤答が多かった。
- 問5 単語に関していえば、“encourage” “likely to” “like”の誤訳が目立った。和訳が不自然な日本語で書かれているケースも多かった。
- 問6 完璧に訳された解答は多くなかった。特にbut以下の文章に誤訳が多く、subtleの意味が踏まえられていなかった。

問題Ⅱ 英作文

- (1)は比較的容易であり、高得点を取ったものが多かった。(2)は問題文の趣旨は、大半が理解できていたが、長い日本語文を英文にうまく移し替えることができていない答案が目立っていた。とりわけ英語構文の間違いが多かった。

問題Ⅲ 現代文(理論的文章)

- 問一 問題文が難しく、本文全体を要約するような問いが最初に来たせいか、できている生徒とそうでない人との差が大きく開いた。変化し続ける作者・作品といった点はおさえられているものの、問題文の一部しか見ていない解答が多かったように思われる。
- 問二 設問で問われている「逆説」の内容を正しく把握できていない解答が目立った。決定稿という固定化された本文を求めたことが、動き続け固定化されないテキストの実態を明らかにしたという点が読み取れていないようだった。抽象概念を理解できていない解答も多かった。

問題Ⅳ 現代文(国語表現)

- 問一 ①⑥は誤答が多かった。④は「女」が正しく書けていないものが多かった。⑦は「寺」が正しく書けていないものが少なくなかった。⑩は「屯」が正しく書けていないものが少なくなかった。また、全体的に丁寧に記入していない解答も見られた。
- 問二 「杞憂」を憂鬱や一喜一憂の意味と誤解した解答が多かった。
- 問三 「おもむろに」を、突然に、急に、という意味に誤解した解答が多かった。

◆ 文学部人間関係学科 前期日程(小論文)

<出題の意図・ねらい>

「情動」に関して、知性的な行為を阻むものとして捉える否定的見方と、知性的な行為を起こす上で不可欠であるとする肯定的見方という対極的な考えを示す文章を踏まえ、私たちの社会生活にとって情動を有することの意味を問う問題となっている。人間関係を考える上で情動のために軋轢が生じる一方、円滑なコミ

コミュニケーションにとっても重要性をもつ点など、多様な観点から情動についての考察を求めている。

<答案の特徴と傾向>

和文と英文とで異なる考え方を説明しているため、内容の把握には英文読解が必要となる。問1・問2ではその英文読解力が問われていたと共に、文章構成における適切な日本語訳の使用にも差が見られた。問3では、情動について感情や感覚と混同したものや、情動を本文に沿って正しく理解・使用していない論述がみられた。また、問題文の議論展開を踏まえていない、あるいは、問題文の内容を踏まえているものの独自の考察が薄い答案が多くみられた。一方で、問題文で示された進化論的、神経科学的視点からの議論はほとんどなかった。身近な例からグローバルな視点へと論を展開したものなど、多様な視点や具体的事例に基づいて論述されているものの評価が高かった。

◆ 文学部比較文化学科 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

問題文は、世界の絵本を紹介する展示会をきっかけとして、現代社会における「教養」のありかたを問う内容である。

問1は、問題文全体を読んで筆者の考えを総合的に読み取れるか、またそれを的確な言葉でまとめる能力があるかを問う問題である。とりわけ、「広い射程」という言葉が単に欧米以外の様々な国の文化ということだけでなく、さらに複合的な意味を持っているかを読み取れるか否かが重要なポイントである。

問2は、問題文をきっかけとして「教養の偏り」という問題性に気づき、独自の視点から論じることができるような独創的な思考力があるか、論理的な文章を作成することができるかを見る問題である。

<答案の特徴と傾向>

問1

問題文中の「広い射程」には欧米以外の様々な異文化ということだけでなく、下層階級も文化の担い手となったこと、ハイカルチャーだけでなく大衆文化も関心の対象となるという三つのポイントが含まれるが、そのうちの一部だけを挙げた解答が多かった。また、上記の「広い射程」が求められるにいたる変化を旧来の「教養」と比較しながら述べるべきところ、比較になっていなかったり、肝心の「変化」の内容が記述されていないなど、問題文で要求されたことに対する応答になっていない解答が散見された。

問2

「教養」と「教育」とを勘違いした答案が多く見られた。設問に指示されている具体例を挙げられていないものも多く見られた。また、問いの中身にしっかり向き合わず、教養と関連性の薄い内容の答案が多かった。また自分自身の「教養」に対する理解を示さない答案も多かった。

◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団面接・グループ討論）

<面接の意図・ねらい>

後期日程の試験は、数人の受験生による与えられた討論テーマに基づいての面接(集団討論)である。テーマを設定した討論場面において、自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる力、情報提供や意見調整など円滑なコミュニケーションを進める力、集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける力などを見ていきたいと考える。なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図をもつものではない。

<受験生の特徴と傾向>

社会的な事象を取り扱ったものや身近な話題などが討論テーマとして提示されたが、善悪などの二元論的な結論を求めるといっても多様な視点から各人の意見を出し合い、検討することを促す課題となっていた。そのため、テーマを多面的に理解・分析できたかによって評価は分かれた。それぞれが具体例や自身の体験を踏まえながら意見を出したり、テーマを保ちながら独創的な見解を提案できたりしたグループでは議論の深まりがみられた。一方で、多様な観点からの議論の難しさ、求められる議題からのずれなど、テーマの分析が十分ではないグループも多く、時に沈黙してしまう場面もみられた。いま何が議論されているか、議論されている内容がテーマとどのように関連しているかといった視点をもつことや、議論を深める力が期待される。

◆ 法学部 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

【出題文選択の背景】

社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）とは、社会における「信頼・規範・ネットワーク」を構成要素とし、「情けは人の為ならず」「持ちつ持たれつ」「お互い様」などの言葉で表現される「互酬性の規範」をもつものとして定義される。また、社会関係資本には、同質な者同士が結びつくボンディング（結束型）な社会関係資本（学校の同窓会、地縁的組織等）と、異質な者同士を結びつけるブリッジング（橋渡し型）な社会関係資本（NPO、ボランティア組織等）があることが指摘される。近年の研究では、社会関係資本の充実が、政府の効率性を向上させるとともに、経済、医療、健康、福祉、教育、自殺防止、防災・防犯などに正の効果があることが実証されつつある。そのため、社会関係資本の重要性は、2010年に総理大臣主催の「新しい公共」円卓会議が提言した「新しい公共」宣言の中で言及されるなど、具体的な政策過程の中で参照される価値として認識されるようになってきている。しかし、このような「社会」に重点を置いた議論に対しては、一方では、「国家」の責任を希釈化させるものであり、他方では、「個人」を埋没・抑圧する契機を孕むものであるとの批判もある。

本問の課題文は、稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門』（中央公論新社・2011年）を出典とするものであり、社会関係資本の概念を説明しながら、その効用と問題点の双方について、ボンディングな社会関係資本とブリッジングな社会関係資本の相違を意識しながら論じるものである。受験生にとっては、社会関係資本という言葉自体には馴染みがなくとも、課題文で言及されている具体例は身近な問題として理解しやすいものであるため、そこから社会関係資本論の基本的な構想を読み取り、自己の見解を述べることが求めら

れる。

現在の日本国憲法は、国家主義に対する強い反省から、「個人の尊重」（憲法 13 条）を中心原理としており、「個人主義」は戦後日本の中心的価値として位置づけられている。その一方で、「国家」と「個人」の間に位置する「社会」の意義は、法律学・政策科学にとっても強い関心対象であり続けている。その意味で、受験生には、社会関係資本論という新しい議論を理解するとともに、それを具体的な問題と結び付けて検討することを通じて、自己の見解を明らかにしてもらいたい。

【受験生に何を望むのか】

受験生には問題文の要求に応えた答案を作成することが求められる。

第一に、課題文の全体構造を把握した上で、社会関係資本の意義・効用・弊害を意識して要約する必要がある。その中で、ボンディングな社会関係資本とブリッジングな社会関係資本の相違にも意識を払うことが望ましい。

第二に、「互酬性の規範」や「絆」が強まることの良い面と悪い面があらわれる具体的事例を一つ挙げ、その事例が、どのように「良い面」に結びつき、どのように「悪い面」に結びつくのかを説明することが求められる。

第三に、社会関係資本論に対する受験生自身の見解を論じることが求められる。その中で、課題文で示されたような効用（「良い面」）と弊害（「悪い面」）があることを踏まえた上で、自己の見解を論理的・説得的に論述する能力が求められる。

<答案の特徴と傾向>

小論文の成否は問題文の要求に応じた解答ができるか否かにかかっている。今回の問題文は、①筆者の議論を要約する、②具体的事例を一つ挙げて、「互酬性の規範」や「ネットワーク（絆）」が強まることの良い面と悪い面を明らかにする、③「社会関係資本」に対する自分の考えを述べる、という三つを要求している。それにも関わらずに、①②③に整理して解答できた答案は必ずしも多くなかった。また、全体構成として①②③に適切な文字数配分を行えた答案はさらに少なかった。受験生には、何よりも問題文を良く読んで、その要求に応えうるように、十分に答案構成を練った上で答案を作成する訓練をしてもらいたい。

課題文を要約する部分では、全体に目配りをして適切な要約を行っている答案に高い評価が与えられた。しかし、「社会関係資本」とは何かという定義に関する記述がない答案は低い評価にとどまった。

「社会関係資本」の「良い面」と「悪い面」を明らかにする具体的事例を適切に挙げている答案には高い評価が与えられた。その一方で、あらかじめ勉強してきたテーマを無理やり結びつけて論じているのではないかと疑われるような、適切ではない具体例を挙げる答案も多く見られた。

「社会関係資本」に関する受験生自身の見解を述べる部分では、どのような立場であろうが、自説の根拠を明らかにした上で、具体的な提言を行っている答案には高い評価が与えられた。その一方で、「筆者の意見に賛成する」とするのみで、課題文の内容に対する独自の評価がなされていない答案も見られた。

最後に、段落最初に 1 マス空けていない答案や行最初に句読点のある答案など文章作成の基本型を守れていない答案も散見された。受験生には文章作成に関する基礎的訓練をしていただきたい。

◆ 法学部 後期日程（面接）

<面接の意図とねらい>

法学部では、一般選抜後期日程において、面接による選抜試験を実施している。面接を実施している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、対話形式により社会的問題関心などを問うことにより、勉学の意欲と幅広い素養を持った学生を選抜するためである。したがって、面接にあたっては、①法学部学生として必要とされる社会に関する基礎的知識と社会的問題関心および論理的思考力、②政策に関するアイデアや提案を行う能力、③プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力、④受験生の入学意欲や将来設計を含む志望動機などを中心として評価している。

<受験生の特徴と傾向>

面接試験では3問を出題した。第1問は、外国人観光客の急増を背景に社会的な関心を集める「民泊」の是非を問うものである。全般的に、「民泊」の背景やメリット・デメリットを多角的に論じることができていた受験生が多かったものの、専ら従来営まれている民宿やホームステイなどを想定して回答する受験生もあり、現在議論されている「民泊」の具体像をつかめているかによって大きく差が開く結果となった。また、「民泊」に関連した政策提案を求める質問においては、「民泊」そのもののみにとらわれず、その背景にある外国人観光客の誘致に向けた具体的な提案など、興味深い回答が目立った。

第2問は、「選択的夫婦別姓制度」導入の是非を問うものである。まず、「選択的夫婦別姓制度」の説明にあたっては、多くの受験生において一定水準の回答ができていたが、「選択的」の意味が理解できていないものや、現行制度（夫婦同姓の原則）を誤解しているものも散見された。また、制度導入の是非については、女性の社会進出を理由に賛成する意見や家族の一体感の崩壊を理由に反対する意見が比較的多かったが、感情論のような説得力に欠ける回答もみられた。

第3問は、本学法学部法律学科または政策科学科を志望した理由および法学部入学後どのようなことを学びたいかを問うものである。受験生の側で事前に予測していた質問であったためか、明確な回答が多かった。しかし、「法学部一般」についての志望理由を述べるにとどまるものや、入学後の抱負・将来設計との関連づけにおいて不明瞭なものも見受けられた。

最後に、今回の面接試験で出題した質問は、新聞、テレビなどのメディアで近時大きく取り上げられている社会問題に関するものである。受験生が普段からこれらの社会問題に対して関心を有しているか否かが、得点差につながったと思われる。

◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、これまでの一般選抜の小論文試験と同様に、地域の再生と創造（地域創生）を担う人材に求められることに関連した文章の中から、次の3点を念頭に置きながら選定しました。1点目は、地域創生やまちづくりを考える上で重要な人材の在り方に関連した文章であること、2点目は、地域創生学群において学生に育ててほしいと考える能力に関連した文章であること、3点目は一般選抜であることを考慮して、一般的、かつ、平易な文章であることです。複数の候補を検討した結果、暉峻淑子（2012年）『社会人の生き方』岩波書店、の当該箇所が、上記選定基準に鑑みて最も適当であると判断し、出題文として選

定した次第です。

今回の設問では、本文中にて筆者が「社会人とはいったい何だろう?」、そして「失業者や、定年退職した人や、主婦や高齢者、障害を持った人は社会人ではないのだろうか?」と問いかけている点に対して、本文の内容に沿って答えていただきました。その上で、これからの時代は社会人としてどのように生きていかなければならないのかを、筆者の考えをまとめる形で答えていただきました。これらについては、地域創生学群で学ぶ者としてどのような人間観や生きる姿勢が求められるのかを示唆している内容となっています。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は解答文全体を通じて評価されることになります。

<答案の特徴と傾向>

ポイントとしては、設題に沿って社会人とは何か、どのような人たちなのかをまず答えた上で、つながりのある社会的動物である人間として、自ら積極的に行動することの大切さを述べることができているのかについて、筆者の考えを丁寧にまとめることを評価点としました。

答案の傾向としては、安易に文章の最後のあたりの文章を抜き書きしている答案、社会人とは何かを説明することはできているが、どのように生きていかなければならないのかを述べることができていない答案も見られました。

一方で、設題のポイントをしっかりと押さえ、論理的展開も踏まえたうえで、簡潔に内容をまとめ、下書きをきっちりとした上で丁寧に書かれた、大変素晴らしい答案もありました。もちろん、このような答案には高い得点がつきました。

最後に、例年のことですが、受験生の意見を求めている設問であるにも関わらず、自分の主張を述べた答案、自分の地域の活動の紹介など、出題文とはほとんど関係のない地域創生に関する事柄について述べている答案もありました。受験生には、本学地域創生学群の小論文の傾向をきちんと踏まえて、入学試験に臨んでいただきたいです。

<面接のポイント>

地域創生学群では、実際の地域に出て様々な活動を行う実習を重視しています。今年の集団面接では単に他者と関わる力だけではなく、特に他者と協働して資料を読み解き、物事を関連付けて考え、内容をまとめる力を持っているかを評価させていただきました。

◆ 国際環境工学部 前期日程 (理科・数学)

理科 (物理・化学)

<出題の意図・ねらい>

【第1問～第3問 物理】

第1問

復元力による振動について基礎的な知識を有し、その知識を応用することができるかを問う。

第2問

熱と物質の状態およびその変化に関する基本的な内容を理解し、それらを活用して問題を解くことができることを確認する。

第3問

電流と磁場、電磁誘導に関する基礎問題。キルヒホッフの法則、電流が磁場から受ける力、誘導起電力、

エネルギー保存則に関する理解を確認する。

【第4問～第6問 化学】

第4問

問1と問2は、熱化学方程式に関する基礎問題である。問3と問4は、反応熱から燃料中の炭素の物質量を求める問題である。問5は、気体の状態方程式に関する基礎問題である。

第5問

ソルベー法を題材に、化学反応式の取り扱い、反応要因、定量的な計算力を問う問題である。

第6問

有機化合物および有機化学反応の基本的な知識と、正答に至るまでの論理的な思考力を求める問題である。問1は完全燃焼の前後での質量から組成式を求めるものであり、有機化学の基礎の基礎とすべき問題である。問2はアルコールやアルデヒドの反応が分かっている問題である。問3はアセチレンについての代表的な反応についての問題である。問4は高分子の一般的な知識を問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

【第1問～第3問 物理】

第1問

問1の基礎問題の正答率は高かった。問2の応用問題では、力の方向を問題文で定義していたにもかかわらず、方向まできちんと示すことができずに不正解となった受験生が多かった。力が方向を持つものであることをきちんと理解してもらいたい。また、指示された有効数字で答えられていない受験生も多く見られた。

第2問

熱と物質の状態変化に関する2種類の問題を出題した。両問ともに標準的な問題であるが、全問正解の答えは少なかった。これは基礎的ではあるが広範囲の知識を正確に理解できていないことによるものと考えられる。

第3問

全体として正答率は悪くなく、満点の答えも散見された。問1では、「ニ」、「ヌ」の正答率が予想より低かった。誘導起電力のある回路についてキルヒホッフの電圧則を適用できていないためと考えられる。問2では、「ヒ」の正答率が低かった。これは、エネルギー保存則の適用に気づけなかったのが原因であろう。

【第4問～第6問 化学】

第4問

基礎問題の問1～問3の正答率は比較的に高かった。問3と問4で問うていることは、基本的に同じであるが、問4は問3に比べて少しひねった形式で問うている。また、問5は問4を受けての問題であり、計算も面倒である。そのためか、問4、問5の正答率は問3に比べて低かった。以上から考えると、知識の「記憶」は一定のレベルにあるが、知識の「理解」が不十分であるため、応用（考える力）に課題があるように思われる。

第5問

問1および問2は総じて正答率が高かったが、問3および問4では化学用語を正確に使用しながら論理的に解答できた答えはほとんど見られなかった。現象についての正確な理解と記述力の向上が望まれる。問4では、塩化ナトリウムを強塩基や強酸などとする誤答も多く見られた。問5は計算問題としては比較的正答率が高かった。誤答の大半は、化学式中の物質量の取り扱いを間違えたか、単純な計算ミスであった。

第6問

問1は正答率が30%程度だった。教科書や問題集に出てくる問題を繰り返し解けば、間違えることはないはずである。これが解けていないと、問2につながっていかない。問2は、落ち着いて論理的に考えればできる問題である。1/4 くらいの答案では完全解答があった。最後のFの高分子の化学式ができていない人が多かったが、問題に示されたポリビニルアルコールをヒントに推定すればできるはずである。問3は比較的正答率が高かった。問4はかなりの人ができており正答率が高かった。

数 学

<出題の意図・ねらい>

第1問

数学Ⅰ，数学Aに関する基礎学力を確認する。数と式（不等式），二次関数，データの分析，整数の性質について出題している。

第2問

数学Ⅱ，数学Bに関する基礎学力を確認する。二次方程式，円の方程式，三角関数，対数関数，数列について出題している。

第3問

微分・積分法に関する問題。グラフの概形，面積の求め方についての理解と，応用力を確認している。

第4問

空間のベクトルに関する問題。ベクトルの基本的演算，位置ベクトルの内分・外分について理解できているか確認している。

<答案の特徴・傾向>

第1問

基礎的な学力と計算の正確性を問う設問であったため，全体的に正答率が高かった。誤答が目立った箇所としては，問1において解答手順は正解であっても最後に条件別の処理がなされていない点であった。その他として問5では未解答の答案も少なくなかった。

第2問

基本的な問題であったが，全問正解者はそれほど多くなかった。問1の正答率が高かったものの，方程式として解答していないものが散見された。問2，問3の正解率は比較的高かった。問4の正答率は非常に低かった。問5は一般項までは比較的高い正答率であったが，数列の和の正答率は非常に低かった。

第3問

問1 グラフの概形を求める問題。8割以上の受験生は答えられていた。残りの答案では，1階微分による極値までは求めていたが，変曲点を求めていない等のミスが目立った。

問2 直線との交点を1点定めたときの傾きと残りの交点を求める問題であり，正答率は高めであった。

問3 面積を求める問題であり，正答率は高めであったが，グラフの上下を考慮せずに，ただ積分をしている場合があった。

問4 3次関数と直線の交点についての条件を求める問題。完全な正答率は低かった。問題の3次関数には定数項が無い場合必ず原点を通るので，残り2つの交点を持つことを示す必要がある。2次関数の異なる正の2実解を取る条件に帰着させて解く方法を想定していたが，この解法で答えている解答は数える程しかなかった。「グラフの形状から明らか」とする答案が見られたが，この方法では，求めた範囲で必ず3実解を持つということを示せていない。

第4問

- 問1 ベクトルの等式を変形する基本的な演算であり、正答率は高かった。
- 問2 内分点の公式を用いて解く問題であり、正答率は高かった。
- 問3 問2と同様に内分点の公式を用いれば解ける問題だが、設問形式が異なるためか、完答率は4割に満たなかった。式の変形まではできた受験者でも、点の位置を正しく記述できていない解答も多かった。
- 問4 問3を完答できた受験者の多くは、問4も正解していたが、高さの比から体積の比を導出できる根拠を示していない解答も散見された。

◆ 国際環境工学部 後期日程（数学）

- 機械システム工学科（第3問必修、第4問選択A、Bの中から1問選択）
- 情報メディア工学科（選択）
- 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問（第4問 選択A）

二次方程式、二次不等式、三角関数、図形、集合、確率に関する基礎的な知識と演算能力を問う問題である。いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待した。

第2問（第4問 選択B）

空間のベクトルと図形に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、ベクトルの演算やベクトル方程式に関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

第3問（第3問 必須）

対数関数に関連して、定積分を使って面積を計算させ、微分積分の基礎知識と計算力を確認する問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問（第4問 選択A）

基本的な知識と計算力を問う問題のため、正解率の高い小問もあったが、満点は少なかった。二次不等式、二次方程式の正答率が比較的高かった。

第2問（第4問 選択B）

空間ベクトルの演算やベクトルのなす角など基礎事項の理解度は比較的高かったが、(4)の図形に関する設問については条件から正しく求められた答案は予想よりも少なかった。また、単純な計算ミスや図形を正しくイメージできていないと思われる答案も見られた。

第3問（第3問 必須）

小問1では、絶対値が付いた対数関数の変域を確認する基本問題で、正解率が高かった。小問2では、小問(1)と同様に、絶対値が付いた対数関数に対して、与えられた条件に対する変域を確認する問題で、一部の条件を漏れた解答がみられた。小問3では、対数関数に関する不等式が表す領域の面積を計算する問題である。小問1と2で求めた変域を用いて、 xy 平面における領域を確認し、面積の計算を定積分で計算すればよい。関数の性質により、曲線と直線の位置関係を正しくイメージできていなくて領域や定積分の上下限に関するミスが多く、正解率が低かった。

◆ 国際環境工学部 後期日程（物理）

- 機械システム工学科（第1問、第2問）
- 情報メディア工学科（選択）
- 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

物体に働く力、力のモーメントとそれらによる加速度についての基礎的な知識を有し、物体の運動について正しく計算することができるかを問う。

第2問

熱力学第一法則、内部エネルギー、気体の法則などの熱とエネルギーに関する基礎知識を理解できていることを確認する。

第3問

問1は、コンデンサーを含む直流回路を考え、直流回路におけるコンデンサーの働きを理解しているかを問う。問2は、コイルを含む直流回路を考え、直流回路におけるコイルの働きを理解しているかを問う。

<答案の特徴と傾向>

第1問

きちんと理解できている学生の正答率は高かったが、生半可な理解しかしていない学生はできておらず、両極端であるとの感想を受けた。理解ができていれば、応用もきちんとできていた。ただ、ほぼ出来ているにもかかわらず、記号の添え字の記載ミス等で得点できていない学生が多かったことが残念である。

第2問

前半は熱とエネルギーに関する基礎知識を理解できていれば、容易に正答できる基本的な問題であり、正答率も高かった。後半は、多少の応用力を必要とする問題であったため、正答率は前半よりもかなり低かった。

第3問

問1については、正答率は高く、満点も散見された。問2については、満点もあったが、正解率は低かった。直流回路におけるコンデンサーの働きは理解しているが、直流回路におけるコイルの働きを理解していない傾向が見られた。

◆ 国際環境工学部 後期日程（化学）

- エネルギー循環化学科
- 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

I. 水素—酸素燃料電池に関する問題である。

問1 電解質にリン酸水溶液を使用する水素—酸素燃料電池の基本的知識を問う。

問2 各電極におけるイオン反応式を示す能力を確認する。

問3 起電力と生成物量から流れた電気量と電気エネルギーを求める能力を確認する。

問 4 水素の燃焼の熱化学方程式で示される理論エネルギーから、問 3 で発生した電気エネルギーの割合（パーセント）を求める能力を確認する。

II. ヘンリーの法則に関する問題である。

問 5 ヘンリーの法則の基本的知識を問う。

問 6 ヘンリーの法則が成り立つ気体の性質を問う。

問 7 気体の状態方程式を使用して、溶解している気体の体積を求める能力を確認する。

問 8 溶解量は圧力と水の量に比例することを使用して、問 7 から溶解する酸素の質量を、さらに、状態方程式から体積を求める能力を確認する。

第 2 問

難溶性塩と溶解度積に関する基礎知識を問う内容である。

問 1 硫化水素の水中での解離反応の化学式を問う。

問 2 電離定数を求める能力を確認する。

問 3 鉄や銅の水溶液と水を混合した後のそれぞれの濃度を求める能力を確認する。

問 4 気体の状態方程式を用いて、硫化水素飽和水溶液の濃度を求める能力を確認する。

問 5 塩酸と硫化水素水溶液を混合した後の水素イオン濃度を求める能力を確認する。

問 6 塩酸と硫化水素水溶液を混合した後の硫化物イオン濃度を求める能力を確認する。

問 7 問 6 までで算出した各濃度を用いて算出したイオン積と溶解度積の関係から、硫化鉄あるいは硫化銅が沈殿するかどうかを判断する能力を確認する。

第 3 問

芳香族に関する有機化学の基礎知識を問う内容である。

問 1 有機化合物の燃焼反応に関する基礎能力を確認する。

問 2 有機化合物の燃焼反応および化学量論の基礎学力を確認する。

問 3 芳香族化合物の燃焼反応に関する基礎的な知識を利用した計算問題である。

問 4 芳香族化合物の化学構造と反応に関する基礎学力を確認する。

問 5 酸化還元反応に関する基礎学力を確認する。

問 6 官能基を持つ芳香族化合物の化学構造と反応に関する基礎学力を確認する。

< 答案の特徴と傾向 >

第 1 問

I.

問 1 ア、イ、エに間違いが見られた。

問 2 酸素のイオン反応式に間違いが見られた。

問 3 問 2 の酸素のイオン反応式を正しく書け、水 18 g (1 mol) あたり 2 mol の電子が移動することを理解できれば正解していた。

問 4 問 3 の電気エネルギーでつまずいた受験生が間違えるのは当然のことであるが、理論的に生じるエネルギーとして 572 kJ を使用する間違いが多かった。

II.

問 5 カ、クに間違いが見られた。

問 6 誤った答えを選んだために減点される答案が多かった。「溶解度の小さい気体」というヘンリーの法則が成立する条件を理解していれば簡単と思われる。

問 7 気体の状態方程式を使用すれば簡単であるが、間違いや白紙が目立った。

問 8 ヘンリーの法則を理解していれば簡単であるが、間違いや白紙が目立った。

第2問

- 問1 基礎的な問題であり、正答率は高かった。
- 問2 基礎的な問題であり、正答率は高かった。
- 問3 基礎的な問題であったが、誤った解答も散見された。
- 問4 溶解した硫化水素の量から、硫化水素のモル濃度を算出する問題であり、正答率は高かった。
- 問5 塩酸から生じる水素イオンのみを考慮して、溶液を混合した後の水素イオン濃度を算出する基礎的な問題であったが、正答率は低かった。
- 問6 混合後の溶液中の硫化水素濃度と電離定数から、硫化物イオン濃度を算出する基礎的な問題であったが、正答率は低かった。
- 問7 イオン積を算出し溶解度積と比較することに着目できた解答は少なかった。着目できた場合においても、イオン積を正確に算出できていた解答はほとんど無かった。

第3問

- 問1 極めて基礎的な問題であり、正解率は非常に高かった。
- 問2 基本的な問題であり正解率は高かったが、係数を導く際の単純な四則計算の間違いが目立った。
- 問3 問2の正解率が高かったためこの問題の正解率は高かった。不正解の解答には、炭素と水素の比は求められているにもかかわらず、分子式に変換する際に芳香族という仮定が抜けているのが目立った。
- 問4 問2、3と関連する問題であったが、問3と比較して正解率がやや低かった。不正解の中には、問題の条件(1)、(2)の内容が考慮されていないものが多かった。
- 問5 酸化剤の反応に関する理解力がやや不足しており、正解率は低かった。
- 問6 正解率は60%強であった。官能基を持つ芳香族化合物の反応に関する基礎知識が不十分であることが見て取れた。

◆ 国際環境工学部 後期日程 (生物)

■ 環境生命工学科 (選択)

<出題の意図・ねらい>

第1問

DNAの転写から翻訳に関する基礎的な知識と理解度を問う問題である。

第2問

植物の気孔の開閉および葉緑体におけるATP合成と炭酸同化に関する理解度を問う問題である。

第3問

地球が誕生してから現在に至るまでの生物の変遷などに関する基本的な知識と理解度を問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1は基礎的な知識ということもあり、正解率は高かった。一方で、問2のヌクレオチドの構造の正解率は低く、特に糖における炭素の位置を正しく理解していないケースが多かった。問3では転写と翻訳を誤解して解答しているケースが多く見られた。問4は正解率が中程度であった。問5、6は転写から翻訳にかけての基本的な過程であり、正解率も高かった。

第2問

気孔の存在やその役割に関してはよく理解しており正解率は高かった。一方で、気孔の開閉の機構に関しては、環境と開閉機構を正しく対応させて理解していないケースがいくつか見られた。葉緑体における ATP の合成と炭酸同化におけるカルビン・ベンソン回路については、中程度の正解率であった。特にカルビン・ベンソン回路の反応を逆方向に理解している答案がいくつか見られた。

第3問

問1～2は地質時代と生物の変遷をきちんと関連づけて理解しているかどうかを、問3～4は化石の分類に関する理解度を問うものであったが、概ね正解率は高かった。問5は生物が地上に進出可能になった過程を説明する問題であったが、説明で使用しなければならない用語を進化の過程に従って適切な順番で使用できていないケースが目立った。問6は種子植物とシダ植物の受精形態の違いについて説明する問題であったが、「乾燥した環境」や「受精」とは関連のない内容や、適切な用語を使用せずにあいまいな表現で説明しているケースが見受けられた。

◆ 国際環境工学部 後期日程（面接）

■ 建築デザイン学科

<面接の意図・ねらい>

グループ面接および個別面接・口頭試問を行った。

グループ面接は受験生を5～6名程度のグループに分けて行った。

- ・個人住宅の設計と新国立競技場のような大きな建物の設計に関する問題
- ・他の受験生の意見

について質問し、回答を求めた。

個別面接・口頭試問では、

- ・自己PRおよびその内容
- ・建物の免震装置や杭などの建築に関連する不正行為
- ・建築分野における飛行型ドローンの有効な活用法

について質問し、回答を求めた。

これらの質問を通じて受験生の思考力および意欲などを確認した。

<受験生の特徴と傾向>

グループ面接

「個別住宅を設計したい」と回答をした受験生が多かった。ディスカッションを進めるうち、新国立競技場のような大きな建物の設計に魅力を感じはじめる受験生やどちらとも設計したいと回答をする受験生がやや増える傾向にあった。

個別面接・口頭試問

建築に関する不正行為については、高い技術者倫理をもっていることが伺える回答が目立った。飛行型ドローンの有効な活用法については、「建物を高い位置から見ることに活用する」など、景観の利用に関連する回答をした学生が多かった。

平成 28 年度入試の出題の意図、採点総評 《推薦入試》

◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

I 全国推薦

<出題の意図・ねらい>

英語で自分の考えや意見を表現することができ、スムーズなコミュニケーションを行なうことができる。

<答案の特徴>

多くの学生が英語でコミュニケーションをとろうという積極性を持ち、難しい質問にも食い下がる熱意を見せた。期待に十分に答える受験生であったと評価できる。

II 地域推薦

<出題の意図・ねらい>

問題文は、芸術鑑賞等においてコンテキストが影響を与える考察を扱ったものである。

問 1 は、理解した内容を簡潔にまとめる問題である。

問 2、問 3 は、英文和訳で、文法事項を的確にとらえて英文を読み取ることができるかを問うている。

問 4 は、自分自身の考えを論理的に、英文で表現できるかを問うている。

<答案の特徴と傾向>

問 1 最後のパラグラフの意味が掴めていない答案が目立った。

問 2、問 3 文の構造がほとんど理解していない。およその意味は正しいが、文法的に正しく理解している答案は少なかった。

問 4 多くのものが、設問に対し直接的に論じていなく、動詞の時制を正しく用いていないので、文法的誤りが目立った。

◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題文は、今日の世界で求められているグローバル人材を育成するため、次代を担う子供たちにどのような教育を行うべきか、親や学校、地域社会、政府の役割と責任を論じた英文である。一方、資料は経済活動が国境を越えて広がるなかで、世界的に活躍できる幹部職員を求めている企業の立場から、グローバル人材とはどんな人たちかを考えた日本語の文章である。問一では、英文による筆者の主張を正確に読み取れているかどうかを確認した。問二では、問題文と資料を比較しながら、それぞれの著者の観点の違いを説明できるかどうかを問うた。

<答案の特徴と傾向>

問一 英語による文章を指定の字数で要約する問題であったが、一部にやや難しい表現があったため、バ

ランス良く要約できていない答案が多かった。それらのなかでも、問題文の前半部分に比重が偏り、後半に触れることが少ないため、著者がもともと主張したい箇所に触れていないものが目立ち、このため評価が低くなったものが多かった。それは、まず、全体の論理展開を押さえた上で、著者の主張を述べた文と前置きされた内容の文とを区別して、要約に取りかかかっていないために起こったことのように思える。理解できる文だけをつなげて要約するのではなく、問題文の趣旨を理解することに力を注いでほしい。

問二 よくできている答案もあったが、その一方で、問われていることを正しく理解せずに作成された答案も見られた。問題文と資料のそれぞれを読んで、グローバル社会で活躍するために必要な能力について、どのような観点から主張を行っているかを答える問題であったが、日本語の資料にもつばら依拠して答案を作成したものや、単純に二つの文章の違いを比較したりしたものがあった。英語の問題文が正しく読み取れているかはもちろん大切である。しかし、まず落ち着いて、問われていることを考えると、よい答案になったと思う。また、問一を答えるのに時間がかかったためかもしれないが、問二では日本語で正しくない文があったり、誤字・脱字が多かったりする答案が目立った。文が長くなって日本語として誤った表現になったり、助詞の使い方がおかしいものになって減点されるのは、もったいない。簡潔な文章で答案を作成するように心がけてほしい。

◆ 経済学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題文の内容は、主に、戦後日本社会における政治的・経済的变化を、特に、労働部門の変化の観点から眺めて、近年の日本社会の不安定さを論じたものである。長い期間における日本社会の変化を問題文から正確に読み取り、その主旨を正しく理解できる能力があるか、また問題文の内容に対する自らの見解を論理的に展開・表現できる能力があるかなどを見るのが出題のねらいである。

<答案の特徴と傾向>

問題文では、具体的に、戦後日本社会における政治的・経済的安定化の要因を「抜け道」や「両翼の安定」の言葉を用いて論じている。問1は、このような問題文の主旨を正確に理解しているかを問う問題となっている。問題文の内容においては、抽象的概念なども多くなく、また身近な事例（商店街）や問題（「抜け道」の喪失）を題材としており、読解の難易度はそれほど高くないものになっている。「シャッター街」や「買い物難民」は、「高齢化社会」の問題ともリンクしたテーマとして、ニュースでもしばしば取り上げられており、日頃から社会問題に関心を持っている意識の高い学生ほど、回答しやすかった問題であった。

これに対して、問2は、近年の日本社会の不安定さやその解消方法について、問題文の主旨を踏まえて自分の見解を論理的に述べる問題となっている。答案においては、問題文の主旨を正しく理解し、さらに現実の様々な例を挙げながら、解答を工夫したものが多かった。しかしながら一方では、少数ではあるが、問題文の見解を踏まえていないか、問題文の範囲を超える主張の答案が見られた。また問題文の見解を踏まえている場合でも、問題文の見解の要約だけで多くの割合を占める答案や、問題文の見解と自分の見解の区別が明確にできていない答案も散見された。

全体としては、日常生活に身近な題材であったにも関わらず、独創的な視点から、問題を眺めて、論理を展開した答案は多くなく、今回、評点を押し下げる要因の一つとなっている。

◆ 文学部比較文化学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題 1

問 1 から 3 では、正しく英文を読み取り、設問に対して日本語で論理的に答える能力を問うた。また問 4 では、自分の考えを英語で論理的に答える能力を問うた。

問題 2

鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波新書）より出題した。水を意味する言葉について、日本語と英語、その他の言語における具体例を示しつつ、言葉の持つ本質に迫った内容の問題文である。

問 1 は問題文全体を読んで筆者の考えの重要点を正確に読み取り、それを自分の言葉でまとめる力があるかどうかを見る問題である。

問 2 は言語をめぐる文化の差異について、みずからの体験を踏まえて論述してもらう問題である。文化に対する関心の高さと、自らの意見を論理的に相手に伝える文章能力を見る問題である。

<答案の特徴と傾向>

問題 I（英語）

問 1 具体的な例の提示に関しては比較的良好にできていたが、Latin America を単なる「アメリカ」や「最近のアメリカ」、Greece を「イギリス」と誤訳している解答が散見された。また具体的事例を書いただけで終わり、These paradoxes of happiness の説明を行っていない解答も目立った。

問 2 設問は「日本は幸福度においてどのような位置づけになると筆者は述べていますか」となっているが、これに対する答えとなっていない解答が多くみられた。出題文全体から読み立ったものに対する自身の意見を開陳しているものが多くみられた。

問 3 問題文中で筆者が挙げた具体例三つを日本語で説明するという設問であるが、単語をそのまま日本語に置き換えただけで、まともな日本語になっていない拙劣な文による解答がかなり多くみられた。また、enrichment を「豊かな」「貧しい」、physical を「心理的な」と誤解した文章も多数見受けられた。

問 4 問題文全体の趣旨が理解できておらず、そのため設問部分の筆者の主張を適切に理解できている解答がほとんどなかった。したがって、「筆者の提示する具体例を踏まえた上で」「幸福の条件を提示」という課題に満足に答えられていた解答はきわめて少なかった。また、基本的な英語の構文を作ることができていない答案はもとより、きわめて基本的なレベルの単語を正しく綴れていないものも少なくなかった。

問題 II（小論文）

問 1

文章の意味を三つのポイントにまとめるよう問題であるが、総合力のない学生が目立ち、二つあるいは一つだけにする解答が多くみられる。

「科学的なことばで把握される対象」との比較であるという主語が不明な文章、あるいは何と何が変わらないかが不明な文章が目立った。

問2

問題文の内容を抑えずに、「日本語と外国語の言葉の意味のずれ」について解答しているものが目立つ。単にその言葉の意味を知らないために生じた認識のずれなどを、例としてあげているものが多い。全体的に問題文及び設問をしっかりと読み込んだ上で書かれた解答が少なかったように思われる。また自分の経験に基づかない一般論を述べる解答も多かった。

◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

今回の問題は、アメリカの女性心理学者が書いた“Women and Family in Contemporary Japan”とその日本語訳（タイトル 「少子化時代の『良妻賢母』」新曜社）から出題した。

問1は、今日の日本女性、とりわけ母親が置かれている子育て・就労をめぐる問題状況について、英文から正確に読み取る力を評価するものである。

問2は、受験者の論文作成能力を、①妥当性：「ローゼンブルースの男性の終身雇用制度に関する見解」の賛否を明らかにして論を展開できているか、②論理性：論文の展開過程が論理的であり、筋が通っているか、③独創性：論文の中に独創性やユニークさがどの程度あるか、④文章表現力：文章が練られているか。誤字・脱字はないか、などの観点から評価するものである。

<答案の特徴と傾向>

問1 比較的理解しやすい英文であったにもかかわらず、設問に沿って、正確に英文の内容を読み取れている学生は少数であった。英文の基本的な読解力が不足している。

問2 ローゼンブルースの男性の終身雇用契約の問題に関する見解の賛否を明確にして論じることができていた論文は少数であり、ほとんどの論文が出題文の趣旨に沿って論が展開されていなかった。その最大の原因はやはり英文の正確な読解ができていなかったことがあげられる。

また、内容も常識的な論に終始し、内容に独創性やユニークさがある回答はほとんど見られなかった点が残念であった。

◆ 法学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

（1） 出題文選択の背景

現在、少年法の適用対象年齢を20歳未満から18歳未満に引下げるべきかが議論されている。このような議論が生じる背景としては大きく2つの流れが指摘できる。まず、従来から凶悪な少年犯罪が発生するたびに厳罰化が必要ではないかとの議論がなされており、少年犯罪の深刻化への対応として少年法の適用対象年齢を引下げ、18歳・19歳の者を「成人」として扱い、その犯罪に一般の刑事処分を適用すべきという考え

である。もう1つは、今年6月に公職選挙法が改正され選挙権年齢が20歳以上から18歳以上に引下げられたことである。選挙権年齢の引下げに伴い民法の成年年齢も18歳以上に引下げるについて具体的な検討が進められているが、あわせて少年法の適用対象年齢も18歳未満に引下げるべきかが議論されている。

本問は、この少年法の適用対象年齢の引下げの問題について論じた2つの課題文から構成される。【課題文A】は、衆議院憲法審査会（2012年3月22日開催）において法務省の見解を述べた資料である。少年法の制度趣旨や内容について説明するとともに、引下げについては慎重な立場をとっている。【課題文B】河合幹雄「少年法で非行少年の九割が更生する」『中央公論』2015年5月号は、現代社会において青少年の成長が著しく遅れていること、少年犯罪は減少傾向にあること等を指摘し、少年法の適用対象年齢の引下げに強く反対している。

受験生は【課題文A】および【課題文B】を読み、少年法の適用対象年齢の引下げについて賛成・反対のそれぞれの立場の論拠を示したうえで、自己の見解を述べるのが求められる。年齢的に、その多くが当事者であるとも言える受験生に、選挙権年齢と少年法の適用対象年齢の関係や青少年（特に、18歳・19歳の者）の犯罪に対してどのような対応が望ましいのかといった問題について考えてもらうこととした。

（2）受験生に何を望むのか

まず、【課題文A】および【課題文B】を読み内容を理解するとともに、少年法の適用対象年齢の引下げについて賛成・反対の論拠としてどのようなものがあるかを読み解くことが必要である。また、課題文では賛成論について詳しく論じられておらず、自分なりに賛成論の論拠を補充するためには社会的な問題に関心を持っていることも必要となろう。そして、賛成・反対のそれぞれの論拠を踏まえつつ、引下げの是非について自己の意見と理由を示すことが求められるが、その際、賛成・反対のいずれの立場にたつにせよ、自説を論理的・説得的に論述することが必要である。

<答案の特徴と傾向>

設問は、少年法の適用対象年齢の引下げに賛成の立場と反対の立場の論拠を示したうえで、引下げの是非について受験生自身の見解を述べることを求めるものであり、それぞれの立場の論拠を十分に提示し、自分と対立する立場に対する効果的な反論を交えながら自説を説得的に論述している答案は高く評価される。特に、課題文では必ずしも十分に言及されていないものの、現在の引下げ論の有力な論拠となっているのが公職選挙法の改正により選挙権年齢が引き下げられたことであるので、引下げに賛成・反対いずれの立場にたつにせよ、選挙権年齢に言及しながら自説を論理的・説得的に展開している答案は高い評価が与えられている。他方、課題文の読み込み不足によるものと思われるが、賛成・反対の論拠の提示が不十分であり、そのため、自説の展開が物足りないものとなっている答案が目立った。賛成・反対の論拠を一応は挙げるものの、それとは無関係に自説を展開しており、論拠の提示と自説の展開に矛盾のある答案や、予め用意してきた内容を今回の設問に強引に結びつけていると思われるような答案も散見された。

なお、今回の設問では課題文の内容を要約することは求めていないにもかかわらず、要約から書き始めている答案がいくつかみられたが、まずは設問をよく読み、何が問われているかを理解することが必要である。

基本的な答案構成に問題があるものも見受けられた。下書き用紙が用意されているので、課題文を読んでいきなり答案を書き始めるのではなく、構成を十分に考えてから答案を作成することを心がけて欲しい。また、全体的な構成だけでなく、文の主語と述語の対応関係に不備があるものや、極めて重要な用語に誤字（例えば、「少年法」を「小年法」としている）のある答案がみられたが、このような基本的な部分でミスをしないように注意してもらいたい。

◆ 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問

- 問1 アセチレンを様々な分子と反応させることでどのような有機化合物が形成されるか、基礎的な知識を問う問題である。
- 問2 有機化合物について計算を通してどのような分子であるか推察する問題である。
- 問3 計算を通して分子の量を正確に捉えられるか問う問題である。

第2問

- 問1 気体の発生法について、化学反応式をつくる能力を確認する。
- 問2 電気分解について、液中の物質または電極の酸化・還元反応を考える能力を確認する。
- 問3 酸性や塩基性の水溶液について pH を計算する能力を確認する。

<答案の特徴と傾向>

第1問

- 問1 良く理解できていた。
- 問2, 問3 概ね理解していた。ただ、分子量の計算や量比について間違っているものがいくつかあった。また、白紙の答案も散見された。

第2問

- 問1 過酸化水素の分解で酸素を発生する際に、酸化マンガン(IV)が触媒として働くことに気がつかない解答が多かった。また、化学反応式の係数を正しくつけられない答案も散見された。
- 問2 電気分解についての基本的な知識があれば容易に解答できる問題であり、正答率は高かった。陰極と陽極を間違える答案も見られた。
- 問3 酸・塩基の pH を計算する基礎的な問題であり、正答率は高かった。pH の定義や、水のイオン積、指数・常用対数の計算を理解できていない答案も見られた。

面接

<面接内容>

(1) 志望理由等に関する質問

エネルギー循環化学科を志望する動機、将来の進路などについて質問し、学科についての理解度、化学への学習意欲、学科への適合性などを見極める。さらにコミュニケーション能力を確認する。

(2) 化学に関する質問（口頭試問）

化学用語、概念、基礎問題に関して質問し、基礎学力を確認する。

<受験生の特徴と傾向>

志望動機に関して、ほとんどの受験生が事前に本学科の教育研究分野を調べて、準備してきた内容を説明した。化学の基礎的質問に対しては、緊張のためか完全に回答できた学生は少なかった。

◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

いずれの問題も高校数学の基本的な知識と計算能力の確認を意図したものであり、正確かつ迅速に解答することを期待した。

問1 図形の面積を導出する基礎的問題である。

問2 絶対値を含む不等式を扱った基礎的問題である。

問3 指数関数および二次関数を扱った基礎的問題である。

問4 等差数列×等比数列の項の和を導出する問題である。

問5 空間ベクトルが同一平面にあることの連立方程式から解を導出する問題である。

第2問（数学）

直線と放物線により構成される図形の面積とその最小値を求める標準的な難易度の問題である。本問は、高校数学の基本的な知識と解答を導くために必要となる基本的な論理的思考力の確認を意図したものであり、題意をくみ取り正確に解答することを期待した。

問1 直線の方程式についての基本的な知識を問う問題である。

問2 直線と放物線の位置関係についての基本的な知識を問う問題である。

問3 直線と放物線で囲まれる図形の面積を定積分で表す方法を問う基本的な問題である。

問4 問3において、図形の面積の最小値を求めるために必要となる基本的な知識と論理的思考力を問う問題である。

第3問（物理）

問1 斜面上と落体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 気体の温度・圧力・体積の基礎を確認する問題とした。

問3 静電気力と電界の基礎を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

問1 殆どの受験生が正答を導いていた。検算をすれば防げたと思われる誤答が散見された。

問2 正答率が比較的高かった。絶対値のなかの正負に応じた場合分けをしていない誤答が目立った。

問3 正答率が比較的高かった。

問4 正答率が比較的低かった。2(公比)を乗じた数列の和を用いる発想に至らなかった誤答が目立った。

問5 正答率が比較的低かった。出鱈目な値を書いた誤答が目立った。

第2問（数学）

問1 与えられた直線の方程式を求める基本的な問題であったため、正答率は高かった。

問2 比較的正答率は高かったものの、2次方程式の判別式の値から題意が満たされる理由を正確に説明できていない答案が散見された。

問3 図形の面積を定積分で表す基本的な問題であるが、式を表記する際の符号の誤りが多かった。

問4 解答を記述している答案自体が少なく、解答の方針は正しいものの完答にまで至った答案は非常に少なかった。

第3問 (物理)

- 問1 なめらかな斜面上と落下運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。
- 問2 気体の温度・圧力・体積の基礎的な問題であるが、全体的に正答率が低かった。その中では、問題イ～ウの正答率は相対的に高かった。
- 問3 静電気力と電界について基本的な知識を問う問題であるが、全体的に正答率は低かった。

面接

<面接内容>

受験生10名に対し、1人10分程度の個人面談を実施した。

- (1) 志望動機と学業以外に取り組んだ活動に関する質問
- (2) 環境問題やものづくり等に関する最近の気になる話題についての質問
- (3) 卒業後の進路等に関する質問

以上、3点について質問し、就学意欲やコミュニケーション能力などを確認した。

<受験生の特徴と傾向>

志望動機については、「環境問題」や「燃料電池車」を例に挙げて機械工学分野や教員の研究分野などに興味をもっていることなどを述べる受験生が多かった。また、ほとんどの受験生がクラブ部活動を積極的にしている印象を持った。ものづくりについての最近の気になる話題については、具体的に話す受験生は少なかった。卒業後の進路については、大学院への進学を視野に入れている受験生が多かった。

◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試 (総合問題・面接)

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問 (数学)

いずれの問題も高校数学の基本的な知識と計算能力の確認を意図したものであり、正確かつ迅速に解答することを期待した。

- 問1 図形の面積を導出する基礎的問題である。
- 問2 絶対値を含む不等式を扱った基礎的問題である。
- 問3 指数関数および二次関数を扱った基礎的問題である。
- 問4 等差数列×等比数列の項の和を導出する問題である。
- 問5 空間ベクトルが同一平面にあることの連立方程式から解を導出する問題である。

第2問 (数学)

直線と放物線により構成される図形の面積とその最小値を求める標準的な難易度の問題である。本問は、高校数学の基本的な知識と解答を導くために必要となる基本的な論理的思考力の確認を意図したものであり、題意をくみ取り正確に解答することを期待した。

- 問1 直線の方程式についての基本的な知識を問う問題である。
- 問2 直線と放物線の位置関係についての基本的な知識を問う問題である。
- 問3 直線と放物線で囲まれる図形の面積を定積分で表す方法を問う基本的な問題である。

問 4 問 3 において、図形の面積の最小値を求めるために必要となる基本的な知識と論理的思考力を問う問題である。

第 3 問 (物理)

問 1 斜面上と落体の運動の基礎を確認する問題とした。

問 2 気体の温度・圧力・体積の基礎を確認する問題とした。

問 3 静電気力と電界の基礎を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第 1 問 (数学)

問 1 殆どの受験生が正答を導いていた。検算をすれば防げたと思われる誤答が散見された。

問 2 正答率が比較的高かった。絶対値のなかの正負に応じた場合分けをしていない誤答が目立った。

問 3 正答率が比較的高かった。

問 4 正答率が比較的低かった。2 (公比) を乗じた数列の和を用いる発想に至らなかった誤答が目立った。

問 5 正答率が比較的低かった。出鱈目な値を書いた誤答が目立った。

第 2 問 (数学)

問 1 与えられた直線の方程式を求める基本的な問題であったため、正答率は高かった。

問 2 比較的正答率は高かったものの、2 次方程式の判別式の値から題意が満たされる理由を正確に説明できていない答案が散見された。

問 3 図形の面積を定積分で表す基本的な問題であるが、式を表記する際の符号の誤りが多かった。

問 4 解答を記述している答案自体が少なく、解答の方針は正しいものの完答にまで至った答案は非常に少なかった。

第 3 問 (物理)

問 1 なめらかな斜面上と落下運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。

問 2 気体の温度・圧力・体積の基礎的な問題であるが、全体的に正答率が低かった。その中では、問題イ～ウの正答率は相対的に高かった。

問 3 静電気力と電界について基本的な知識を問う問題であるが、全体的に正答率は低かった。

面接

<受験生の特徴と傾向>

志望動機、将来の進路、学科の教育内容については、よく準備して明快な回答をした受験生が多かった。

数学の口頭試問については、独力で正解に至る受験生、少しヒントを与えると正解に至る受験生が多かった。しかし、ヒントを与えても解法を見いだせない受験生もいた。

◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

いずれの問題も高校数学の基本的な知識と計算能力の確認を意図したものであり、正確かつ迅速に解答することを期待した。

問1 図形の面積を導出する基礎的問題である。

問2 絶対値を含む不等式を扱った基礎的問題である。

問3 指数関数および二次関数を扱った基礎的問題である。

問4 等差数列×等比数列の項の和を導出する問題である。

問5 空間ベクトルが同一平面にあることの連立方程式から解を導出する問題である。

第2問（物理）

問1 斜面上と落体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 気体の温度・圧力・体積の基礎を確認する問題とした。

第3問（造形）

問1 建築のデザインを行う上で基礎的な素養として必要な立体的な空間の認識力・想像力、三次元的な表現力、スケッチによる描写力等の総合的な造形力を見る。

問2 与えられた質問に対して的確に題意を捉え、自らの見解を述べているかを問う問題である。特に、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見る。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

問1 殆どの受験生が正答を導いていた。検算をすれば防げたと思われる誤答が散見された。

問2 正答率が比較的高かった。絶対値のなかの正負に応じた場合分けをしていない誤答が目立った。

問3 正答率が比較的高かった。

問4 正答率が比較的低かった。2(公比)を乗じた数列の和を用いる発想に至らなかった誤答が目立った。

問5 正答率が比較的低かった。出鱈目な値を書いた誤答が目立った。

第2問（物理）

問1 なめらかな斜面上と落下運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。

問2 気体の温度・圧力・体積の基礎的な問題であるが、全体的に正答率が低かった。その中では、問題イ～ウの正答率は相対的に高かった。

第3問（造形）

問1 彫刻がどのような立体であるかを想像し、異なった角度から描き出すことによって、立体的な空間の認識力、想像力、また、スケッチ力等を見た。異なる角度からの描写に関しては、ある程度立体感覚がうかがえる答案が多かった。一方、例えば、手前の下の部分が浮いているところを見逃していたり、奥行きにずれがある答案が多くみられた。また、立体感を線だけでなく、影を使ってうまく表現できている答案があまりなかった。スケッチによる表現力は、全体的にややレベルが低く、彫刻全体を的確に表現できていると思わせる答案が少なかった。時間配分が悪かったのか、未完成の答案もあった。

問 2 抽象的な彫刻から、作者が、どのような意図で何を表現しようとしているのかを想像し、説明することによって、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見た。文章自体は、しっかり書かれている答案が多かったが、語彙や表現力に乏しく稚拙に感じられる文章もあった。独自の発想で、個性的な答案が多く見られたが、あまりにもかけ離れた発想で、共感を得難い解答もあった。

面接

<面接内容>

10分程度の個別面接を行った。

- ・志望動機、高校生活の充実度や実績
- ・本学科の教育目的・内容・特色の理解度
- ・建築に対する興味や意識の高さを確認
- ・建物の屋根形状の違いによる特徴や機能（共通点と違い）
- ・将来の夢や目標、それを実現させるための方法
- ・本人の長所を確認

に関する質問をし、回答を求めた。

<受験生の特徴と傾向>

- ・志望動機や本学科の教育目的など事前に準備していた質問に対しては、調べた内容をきちんと理解し自らの言葉で回答する受験生がいる一方、内容を丸暗記して回答する受験生が目立った。
- ・多くの受験生から常日頃から建築に対する興味や意識の高さがあることが強く感じとられた。
- ・想定外の質問に対しては、自分の考えを落ち着いてきちんと述べることができる受験生がいたものの、論理的に回答することができない（無回答を含む）受験生がいた。さらに将来の夢や本人の長所について回答することができない受験生もいた。

◆ 国際環境工学部環境生命学科 推薦入試（総合問題・面接）

【総合問題】

（第1問 必須）

（第2問 A, B, Cから1題選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

- 問1 アセチレンを様々な分子と反応させることでどのような有機化合物が形成されるか、基礎的な知識を問う問題である。
- 問2 有機化合物について計算を通してどのような分子であるか推察する問題である。
- 問3 計算を通して分子の量を正確に捉えられるか問う問題である。

第2A問（物理）

- 問1 斜面上と落体の運動の基礎を確認する問題とした。
- 問2 気体の温度・圧力・体積の基礎を確認する問題とした。

第2B問（生物）

- 問1 アミノ酸に関する基礎的な知識を問うと共に、酵素反応のグラフを正しく読み取れるかを問う問題

である。

問2 自然免疫・獲得免疫といった、免疫系の基本的な知識・理解を問う問題である。

問3 DNAの損傷がどのような問題に繋がるかの理解度を問う問題である。

第2C問 (化学)

問1 気体の発生法について、化学反応式をつくる能力を確認する。

問2 電気分解について、液中の物質または電極の酸化・還元反応を考える能力を確認する。

問3 酸性や塩基性の水溶液についてpHを計算する能力を確認する。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1 良く理解できていた。

問2, 問3 概ね理解していた。ただ、分子量の計算や量比について間違っているものがいくつかあった。
また、白紙の答案も散見された。

第2A問 (物理)

問1 なめらかな斜面上と落下運動について問う問題であり、問題ア～ウの正答率は概ね高かったが、その他の正答率は低かった。

問2 気体の温度・圧力・体積の基礎的な問題であるが、全体的に正答率が低かった。その中では、問題イ～ウの正答率は相対的に高かった。

第2B問 (生物)

問1 よく理解していた。

問2 抗原に対して特異的な抗体が作られる仕組みを正しく理解しているものは少なかった。

問3 DNAの変異とタンパク質レベルでの変異へと正しくつなげてそれがどのように重要であるか理解しているものは少なかった。

第2C問 (化学)

問1 過酸化水素の分解で酸素を発生する際に、酸化マンガン(IV)が触媒として働くことに気がつかない解答が多かった。また、化学反応式の係数を正しくつけられない答案も散見された。

問2 電気分解についての基本的な知識があれば容易に解答できる問題であり、正答率は高かった。陰極と陽極を間違える答案も見られた。

問3 酸・塩基のpHを計算する基礎的な問題であり、正答率は高かった。pHの定義や、水のイオン積、指数・常用対数の計算を理解できていない答案も見られた。

【面接】

<面接内容>

志望動機、印象的な実験や現象などについての説明、将来の進路などについて質問を行い、それに対する受け答えから意欲・コミュニケーション能力、学力、理解力について評価を行った。

<受験生の特徴と傾向>

皆、面接官の質問に耳を傾け、それについてしっかりと説明ができていた。

平成 28 年度入試の出題の意図、採点総評 《AO入試》

◆ 外国語学部英米学科 AO入試

<出題の意図・ねらい>

1. 英文読解力と講義の聴解力を見る問題。英文はやや難易度が高い部分もあったが、論理的に記されていた。講義を良く聴いていれば正しい内容理解ができたはずである。それができているかどうかの評価のポイントである。
2. 模擬授業担当教員の説明を頭に置きながら英文を読み、設問に正確に対応した解答を英文で論述する問題である。
3. 模擬授業担当教員の説明を正しく聴き取り、その上で、自分の考えを論理的に述べることが出来るかどうかを見る問題。語学力を超えた総合力を判断する問題である。

<答案の特徴と傾向>

1. 課題文は論旨が明確で、講義もよく整えられたわかりやすい展開だったため、この問題の正解率は非常に高かった。
2. 完答できた答案は意外に少なかった。模擬授業担当教員の説明を正しく理解して英文を読み、設問に対応した解答をすることが高得点につながった。逆に、設問とずれた解答をした場合は当然点数が非常に低くなった。
3. 本試験で最も重要な設問である。やや難度が高かったと見え、評価の低い答案が多くなった。反面、設問を正しく理解し、論理的に論述できた答案は評価が高かった。

<二次試験面接のポイント>

一次試験において英語の読解力および論述力を見ているので、二次試験では、口頭で意見を述べる力を見ることと、今後英米学科で学習していく上での適性を判断することがポイントとなったが、合格者はいずれも高い能力と適性を示していた。

◆ 地域創生学群 AO入試

<出題の意図・ねらい>

地域創生学群における今年度のAO入試では、一次選抜において、模擬授業を聴講して作成するレポート課題を行いました。二次選抜では、集団面接としてグループディスカッションとその内容の発表、個別面接では集団面接の課題への取り組みについての振り返りと、そして地域創生学群で何をどのようにして学びたいのかを何う内容としました。

これらの出題の意図・ねらいは、地域創生学群に入学してから求められる基礎学力、コミュニケーション能力、共同・協働性、経験から学ぶ力、そして地域創生学群で学びたいという意欲を十分に持っており、自分の言葉で表現することができるか、あるいはその可能性を秘めているのかということを確認する点にありました。

<答案の特徴と傾向>

一次選抜

一次選抜では、地域創生を大学で学ぶには、地域創生を学問的に捉える必要があり、学問的に捉えるには科学的思考が必要不可欠であることを中心にして模擬授業を展開しました。科学的思考をする上で、仮説を立てることが最も重要であり、よりよい仮説を立てるには、これまでの先行事例で成功した時の仕組み、あるいは、失敗した先行事例の原因を論理的に分析することが欠かせないことを、食塩水や砂糖水の冷却実験の具体的な例を用いて述べていきました。この模擬授業の内容は、大学で地域創生を学びたいと考えている高校生には、コースを問わず、必須の考え方であるため今年度の模擬授業の内容としてふさわしいものであると考え、実施いたしました。

レポート課題では、講義内容を通して大学での学びについて論述するというものでした。答案の傾向としては、講師の伝えたかった内容を丁寧にまとめることができている答案が多くみられました。その一方で、大学での学びという題意に沿った論述がなされていない答案や授業の後半部分をただまとめたものも少なからずありました。さらに、受験生の自己の体験や感想を記述した答案も見られました。このような答案については、評価を低くしました。もちろん、文字数が極端に少ない、誤字脱字が多いレポートについても、同様に減点対象としました。

二次選抜

二次選抜では、集団面接と個別面接を実施しました。集団面接ではグループで取り組む課題を、時間を区切りながら取り組んでいただきました。地域創生に対して否定的な文章を読んだ上で、一次選抜での模擬授業の内容を踏まえて批判的に検討をして、意見交換をしてもらいました。その上で、どのような地域創生の取り組みが必要かを話し合ってもらいました。そして、それまで話し合ってきた内容をポスターとしてまとめ、全員で発表をしていただきました。個別面接では、集団面接についての取り組みについてふりかえっていただき、地域創生学群で何をどのように学びたいと考えているのかをお伺いしました。

集団面接では、多くの受験生がコミュニケーション能力を発揮し、チームとして課題に取り組むことができていました。個別面接でも、多くの受験生が自己の経験をふりかえり、そこから学ぶことができていました。さらに、地域創生学群で何をどのように学びたいのかというビジョンを描くことができていました。しかし、そのような中でも、表面的なコミュニケーション、他者の話を傾聴することができない、あるいは自己を客観的にふりかえることができない、そして何より地域創生学群での学びについて明確な意欲やビジョンを描けていないと思えるような受験生もいました。このような受験生については、大きく減点対象としました。